



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024

第3号 1999年3月発行

東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03)3418-4933
編集/発行: 広報部

復活の主と共に



牧師

陣内厚生

イースターの朝。聖書の表現で言えば、「朝早く、まだ暗いうちに」起きて、定められた公園内の小高い芝生の丘に集合。東側斜面の眼下に広がる乳白色の湖がしだいに輝きを帯びて、向こう岸の雲の切れ間から太陽が昇り始める頃、丘の上では、二、三十名の人びとが讃美歌を合唱し始めます。静まりかえった人気（ひとけ）のない公園で行われる、それはすがすがしいイースター早天祈禱会なのです。

私の前任地・宇部では毎年イースターの早朝、市内の超教派の有志たちによってこの行事が続けられてきました。私も初回から（二十数年に渡る）欠かさず出席するのが恒例でした。これは聖書に倣って、週の初めの日の早朝、婦人たちが何物をもさておき、主イエスの葬られた墓にかけつけたことを、私たちが追体験することでもあります。そして、すでに甦られ墓を去られた主が、私たちの常識の領域を超えて、新しいいのちに生きるべきことを、日の出の輝きの中で促して下さることを実感

させられるのです。

さて、イースター（復活祭）は、キリスト教にとってクリスマスと並ぶ祝日であることは言うまでもありません。教会は主イエス・キリストの復活によって成り立ち、復活を決定的・中心的な使信として持ち続けています。その復活信仰を、私たちはどれだけ信仰生活の中に日常化できているでしょうか。

コリントの信徒への手紙一の一五章一三―一四節で、著者パウロはこう語っています。「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」と。すなわち、キリストの復活がないなら、パウロら証人たちの宣教、その福音は全然意味をなさず、それはかりか虚偽だということになります。さらに一六節には、「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」と言っ

ています。一五章全体にわたり、パウロが復活の出来事をいかに伝えようとしているか、その真に迫る文章を読む時、私たちの信仰はいま一度復活の重大さの上に築かれていることを知らねばなりません。

ところで、復活とはいったいどういう意味なのでしょう。ただ、死人が息を吹きかえすということではないのです。この罪と汚辱にまみれている身体が、息を吹きかえし、くりかえし生きたところで意味はありません。そうではなくて、この死ぬべき身体、いわば生ける屍である人間が、神のいのちによって生かされるということ、新しく創りかえられ、生きかえるということなのです。創世記二章には、「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とあります。そのようなことが、私たちとこの世に、今もう一度起きなければならぬのです。つまり、混沌の中に身をまかせたような、生きる目標を失い、未来の展望を持たずにいる人間と、人